

日本記者クラブ会報

第197号
1986年
7月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
プレスセンタービル9F 100
◎社団法人 日本記者クラブ
電話五〇三―二七二二(代)

会員数の急増を抑制へ



会員資格委員長 渡 辺 恒 雄

日本記者クラブ会員の入会資格を、これまでよりいくらか厳格に審査しなければならなくなった。これは理事会の決定により、施設運営委員会、会員資格委員会などで審議した末のやむを得ない措置である。

まず、会員数の増加傾向をみると、五十一年十月一日には一、〇七九人であったのが、ほぼ十年たった六十二年五月には二、二四二名と倍増している。当然に施設の利用上ペンク状態になり、八階に約六十坪のスペースを借り増して会議室等に当てることになったが、会員数がこれまでの傾向で増え続ければさらにスペースを拡大しなければならないが、

会員の納入する会費で運営する以上、スペース拡大には限界がある。対策としては、会員数の総枠を決めて新入会を抑制する方法もあるが、新入会を希望するOBの皆さんなどにお気の毒である。

しかしこれまで会費収入を確保するため、野放図に会員増加策をとってきた傾向もあり、そうしたことを反省し、日本記者クラブの定款第四条に定められた、本来の目的に添うことを心がけながら入会審査に当たることで、ある程度会員数の急増を抑制し、総枠規制はしないことにした。

ちなみに、ワシントンのナショナル

ル・プレスクラブ(A)および東京の外人記者クラブ(B)と日本記者クラブ(C)のスペースを比較してみると、次のようになる。

会員数 施設

- A 四、二〇〇人 一、三二二坪
 - B 一、九八五人 四九三坪
 - C 二、二四五人 三三三坪
- しかも、ナショナル・プレスクラブはビルを所有しているので家賃はゼロであるが、東京の外人記者クラブは年間約五千万円、日本記者クラブは約一億円の家賃を払っている。また外人記者クラブは財源確保のためか、プレス以外のかんりの企業会員を入れており、今日では新入会希望者を相当数ウェーティング・リスト待ちにして抑制している。

また日本記者クラブでの記者会見や昼食会等には、内外の最高級のVIPを招いており、その警備上の問題も考えておかねばならない。先頃も、会員のある外人の詐欺師が逮捕

されたが、その入会審査はまことにズサンであった事実も判明した。

会員の入会は、二名の基本会員の推薦のあるものを資格委員会で審査することになっているが、委員会としては推薦者にできるだけ責任を持っていただき、たいして面識のない人まで頼まれたから推薦する、というようなことのないようにお願いしたい。

本来日本記者クラブは、内外の重要ニュース・ソースとの接触の多角化、報道機関相互の交流の緊密化及びジャーナリズムの職業倫理の向上を目的として作られたものであるから、こうした目的と何ら関係のない人々が、別の事業のために施設を利用するようなことは歓迎できない。また、クラブ運営の財源も本来の会費収入を基礎とし、プレス以外の会員を会費収入増収の目的のためにやたらに増やすことはよくないと思う。

以上の点を考え、クラブの品位を保ち、会員の便宜をはかるよう、会員資格の審査にあたっては十分慎重にしていきたいと思うので、会員の皆さんのご協力を懇望する。

とっておきの話

東京裁判

一枚の傍聴券



高木盛久

「とっておきの話」を拝読すると、ほとんどが中央での政財界を中心としての、あるいは国際的事件でのそれぞれの苦労話で、私のような地方紙で、それも社会部のみを経験した者は果たして何を書いたら……とさんざん頭を悩ませた。

地方は地方なりに、さまざまの犯罪あり、天災あり美談ありで、それぞれ取材上での成功、失敗の思い出は数限りなくあるが、それこそ、そんなことは誰でも経験されたことだろうと面はゆく、結局、一度どこかで書いたことがあるが、その話を書いてみることにした。それは東京裁判にまつわる。

ニュールンベルグ裁判と並び世紀の裁判だけに他紙、特に中央紙の力の入れ方は大変なもの。それぞれおそらく数十人のチーム編成で取材に当たり、日々の紙面を飾った。私がいた新大阪

新聞ではそんなわけにはいかない。せいぜい共同からの記事を盛りつけるにすぎなかった。

地方からの東京特派員

ところが判決日が近づくにつれ、そうはいかないとの判断で、私とその矢に当たった。地方からの東京特派員である。判決の瞬間を直接目にし、耳に聞き、そのまま詳細に描写せよ。それが上からの指示であった。他にない横型紙面で、もっぱら文化面に力を入れていただけに、この判決の瞬間を読ませようとの方針なのだ。

上京した。そしてまず記者席の確保に当たった。毎日新聞の夕刊紙のような形で創刊された新聞だけに、その点では毎日の方で動いてくれた。記者席券を手に入れた。もう安心、あとはこ

の目で、この耳で……
そしてまず書き出しの文章をどのように……
などとあれこれ考え、まさに大張り切りの態であった。ところが、判決の何日前だったと思う。裁判があり行ってみた。

話はちょっと横へされるが、この市ヶ谷法廷は元の陸軍省の内部を改造したもので、その工事前から工事中ずっと私はこの建物の中にいた。終戦直後、大本営付から参謀本部付、陸軍省付と転々と配転させられた。いわば涉外将校ということで、厚木にも行かされたし、GHQにも参謀と一緒にいたりもした。次々配転させられたのは、それぞれが解体というか解散させられたからで、最後は復員省詰となり、この法廷工事を監督する米軍部隊（隊長は少尉であったが、数では一個小隊もなかったと記憶する）との間の連絡に当たられた。

陸相室を占拠していた米少尉

いろいろな注文をとりついでが、いまでも印象に残るのは、その少尉が

つての大相室を占拠し、呼ばれて行く
と、かつて東條陸相があの顔でいかめしく座っていたであろう大机の上に、
デンと足を上げていた光景である。

おかげで復員が一年遅れ、当然中尉になれる期間になっていたの、かつての軍務局長、当時は復員省第一局長にじかに交渉に行った。考えればもう陸軍は消滅しているのだから、バカな話だが、その時は真面目だった。

その時の局長の話、「いや、中尉でなくてもいいよ、少佐ではどうだ」。

その思い出の法廷に入って、自分の担当席に座ってみた。ところがである。その席は記者席の最後列、最前列まで数十席あったような気がする。裁判官席も前の連中の頭にさえぎられてほとんど見えない。右手の被告席も上の方の段がやっと思える程度。

がっかりした、というより愕然とした。耳は聞こえるだろうが、これでは肝心の「目」での取材は絶対無理。なんとかしてと、まず毎日側に交渉したが、そこはいわば子会社の弱さ、「前の方の一席を」は一蹴された。いろいろ手を回したがダメ、これではどうしようもない。出るは溜息ばかり。

二百人の長蛇の列

その時フツとひらめいた。傍聴席だ。二階から見下せるのだから、むしろ一階の記者席よりずっとよい。調べてみた。傍聴券は前日、午前九時から手渡すことになっていた。終戦連絡事務局で……。このあたりの細かい気憶は大分薄れているので、あるいは間違っている、ご指摘があるかもしれない（んが）

いよいよ判決の前日。七時頃行けばなんとかなるだろう。行ってみた。甘かった。世紀の大判決なのだ。もう延々の列が……。確か、枚数は三十枚かそこらだったと思う。目で追ってみただけで、その時刻で二百人近く、そしてどんどん増えている。

もうどうしようもない。せい一杯あの記者席で取材するしかない。締めるのも早い。どこかで朝食でもとろうかと、立ち去りかけた。ところが、窓口近辺でワイワイ騒いでいる声が耳に入った。どうしたのかと、戻ってみると、なんと窓口を中心に右と左に一列ずつ分かれて並んでおり、その先頭の連中が、「こちらが早い」「いやこっちの方が正統だ」と言い争っているのだ。

はじめいい加減に並んでいたのが、後に人が来るにつれて、向かい合いう形で列が多たつてきあがったというわけ。聞けば前の連中はその前日から来ていると言う。交付時間が迫るにつれて、その騒ぎはエスカレートするばかり。双方の言い分を聞いているうちに、私がいわば時の氏神になってしまった。また、ならなければ収まりがつかなかった。

双方の列の代表を二、三人決めて、話し合いの中に入った。「こっちの方が早く来た」「いや、こっちだ」「後に並んでいけばいいものを、脇に並んだからこんなことになったのだ」とくり返し、くり返し……。言うだけ言わせて、さてと……枚数に制限があるのだから、一方に偏すれば片方はとうてい収まりつこない。そこで代表がジャンケンをして勝った方がまず一番、敗けた方が二番、あとはこの順で交互に交付を受ける。どうですか……。いや、それはおかしい」「それは困る」とは言いながらも、最後はそれしか解決の途がないと思っただけか、円満手打ち。やがて時間が来て交付がはじまった。とうてい見込みがないとみた連中はほとんど帰って行く。

それじゃこちらも、と帰りかけて、

その時ひらめいた。交付を受けた人から、なんとか譲り受けることができないうらうか。

二時間の説得工作で

目をつけた。一方の列の前から十番目ぐらいに並んでいるかすりを着た学生らしい人物、間違いなく交付される。よし、やってみよう。交付を受けて帰って行くこの青年の後をつける。新橋の方に歩いて行く。かなり行って、ようやく話しかける。名刺を出す。「ちょっと近所の喫茶店で」。相手はきょうの状況の取材だと思っただけか、素直について来た。コーヒーを一口飲んだところで切り出した。

「譲っていただけませんか」。顔色が変わる。「とんでもない。自分はきのうの夜中に藤沢から来ているのです。一生の思い出に……。そこでいまでも思い出すが、ただ切々と訴え続けた。「君はそのふたつの目で君だけが見聞きして、君一人の印象に収めるだけだ。自分は自分のふたつの目を通して、小新聞ながら十何万という読者に伝達することができるのだ。そこを何とか理解してほしい」「ボクじゃなくてよその人から譲ってもらってく

ださいよ」。二時間近くの押し問答。

しかし今から思うと、やはり純真な学生だった。長い沈思のあと、「お譲りしましょう」「ありがとう」と思わず手を出して、相手の手をしっかり握った。汗ばんでいたことを思い出す。

当日の判決の模様はさまざまに書かれているので格別にふれないが、ウェップ裁判長の「デス・バイ・ハンギング」の重々しい声、東條被告が耳からイヤホンをはずして軍人らしく礼をしたあの姿。なかでも、広田弘毅被告が判決を受けた直後、フツと二階の傍聴席に目をやったあの目が語った無言の言葉。二階には、お二人のお嬢さんがいて、ハンカチで顔を覆って泣いた……。そんなことが、この目で見、この耳で聞けたのも、あの好意に満ちた一枚の傍聴券のおかげだと、いまもしみじみと感謝の念を禁じ得ない。彼はどうしているのかな。

たかき もりひさ氏略歴 大正七年神戸市出身。神戸商大卒。昭和二十一年新大阪新聞入社。社会部長を務める。二十八年日本テレビ放送網へ。業務局長、常務取締役、専務取締役ネットワーク本部長などを経て、五十六年代表取締役副社長・放送本部長。五十七年から代表取締役社長。

南ア 報道規制

ワーキングプレス

六月十二日の非常事態導入以後、南アでは厳しい報道規制が敷かれている。暴動の様子を報道することはできないし、治安部隊の行動ぶりも書けない。黒人居住区への立ち入りはいつさい禁止されている。ところがその状況の中で、先日うっかりソエト黒人居住区に入ってしまった。

ソエトほう起十周年の十六日早朝、入れぬまでもせめて周辺の様子を見ようと、黒人タクシードソエトに向かった。「治安部隊の道路検問がある。そこまで行って引き返そう」。運転手君にそう言って、シートにもたれてうとうとしていた。

「どこまで行きますかね」
運転手君の声でハッと外を見ると、なんとソエトの中まで入ってしまったのではないか。
朝早すぎて、道路封鎖はまだ行われていなかったのだ。こりゃいけないと引き返した時にはすでに封鎖完了。検問の治安部隊にがちり油をしぼられた。
しかしもちろん、この目で見たソエトの様子を書くことはできな

いし、検問がどう行われていたかも書けない。もし書いたら二万ランド(約百五十万円)の罰金か十年の禁固、そして国外追放である。

政府は毎日午後三時に記者会見を行う。その発表だけが、唯一報道できることなのである。
入手している情報や体験したことを書けずにいららしていた記者たちは、この場の有効利用法を

政府発表のみ報道可

松本仁

思いついた。手を上げて自分の情報を述べ、「それは確かか」と質問する。政府が何と答えようと、それをすべて記者会見の描写として書いてしまうという手法だ。例えばこんな具合である。

「本日行われた記者会見でA紙記者は、ソエトで治安部隊と住民との衝突があり、十一人が負傷した事件についてただしたが、政府側は知らないと答えた」――。

この方法は二日間ほど続いた。しかし、さすがに三日目には禁止された。だが続いて、BBCが一計を案じた。報道規制が南アにいる記者だけを対象としている盲点を突いて、ロンドンからダイヤル直通で黒人居住区の指導者に電話した。そのインタビュアーをそのまま放送してしまったのである。

「この方法は二日間ほど続いた。しかし、さすがに三日目には禁止された。だが続いて、BBCが一計を案じた。報道規制が南アにいる記者だけを対象としている盲点を突いて、ロンドンからダイヤル直通で黒人居住区の指導者に電話した。そのインタビュアーをそのまま放送してしまったのである。」

記者団の質問に政府側は「単なる技術的トラブルである」と答えた。BBC特派員が手を上げた。

「ソエトの友人に電話して、『ミセス・マンデラ』(獄中の黒人指導者ネルソン・マンデラ氏夫人)と一言いうたびに電話が切れてしまふ。これも単なる技術的トラブルなのか」

記者会見場は大爆笑となった。面白いのは、南ア政府がそれでもなお記者会見を続けていることだ。本当かどうか知らないが、とにかく「昨日の死者数」を発表す



6月15日 南アフリカ共和国ヨハネスブルグ市内に現れた報道規制に抗議する落書き(写真提供=WWP)

(まづもと じんいち 朝日新聞社ナイロビ支局長)

慶大 男女産み分け

ワーキングプレス

「遺伝病の悩みをもつ夫婦にとってこんな朗報はない」「自然の摂理に反し、生命を冒とくするものだ」——慶応大学医学部の飯塚理八教授（産婦人科学）らの研究グループが臨床試験を行った男女産み分けは、各方面でさまざまな論議を呼んでいる。

慶大グループが開発した男女産み分け技術パーコール法は、もとも精子の数が少なくて妊娠しにくい患者の精子濃縮や洗浄に使用されていた方法だった。この方法を使うと女の子が多く生まれることが分かり、慶大では五年ほど前から本格的な研究に取りかかった。手法は

シリカゲル系のパーコールという液体を使い、精子を密度の違いを利用して遠心分離法で分けて、女の子をつくるX精子だけを分離しようというもの。

慶大グループは五十九年のはじめには九四パーセントの純度でX精子を分離することに成功、この年のうちに産み分け技術の臨床試験に踏み切った。パーコール法で分離した精子はポランテアの婦

人に人工授精され、翌六十年五月には産み分け女児第一号が誕生。六十一年のはじめまでに合わせて六人の女児が相ついで生まれた。一切公表されることはなかった。

NHKが慶大グループの男女産み分け取材に取りかかったのは、六十年暮れのこと。関係者の壁は厚かったが、半年間にわたる取材の末慶大グループの研究内容を解

昨年暮れから取材に入る

佐藤

悠

明、映像化の努力も重ね五月三十日の夜のニュースで、「産み分けで六人の女児誕生」を伝えた。

慶大グループの研究が公になって以来、この一か月余りの間に交わされた論議のポイントは、大きく分けて三つある。

第一は、産み分け技術の安全性と有効性の問題。慶大によると産み分けられた女児六人は、全員正常分娩で先天的な異常などもみら

れなかった。しかしパーコールが精子の生理機能に与える影響のチェックは十分とはいえず、この技術が本当に安全かどうかは子供の成長を長期的に追ってみる必要がある、とする意見が出ている。また有効性についても産み分けがパーセント確実にできるといふ保証はなく、技術としてはまだ未熟とする声もある。

第二は男女の性比のバランスの問題。男女の役割に差のある社会では、親は有利な性の子を持ちたいと願うだけに、産み分けが自然になる社会の性比、つまり男女のバランスがくずれてしまうおそれがある、という指摘である。

第三は、最も議論があるところだが、生命倫理に関する問題。これまで自然の摂理にまかされていた生命の誕生に、どこまで人為的な操作を加えることが許されるか、という基本的な疑問が出されている。また親の希望に添う形で行われる産み分けは、単なるせいだけで医療とはいえないという意

見も少なくない。

産み分けをめぐる論議が高まる中、慶大医学部倫理委員会は六月九日初会合を開いて産み分けを審議、血友病などの伴性遺伝病治療のための研究目的に限って臨床試験は認めるものの、当面家族計画への応用については否定する方針を示した。大学として飯塚教授グループの研究に一定の枠をはめたのである。

しかし慶大の産み分けは、既に開業産婦人科医グループ・SS研究会にもそのノウハウが流れ、中にはパーコール法を使って二十四人が妊娠、うち二十二人が希望通り女児を産み分けたとしている医師も登場。このように今のところ開業医に対する歯どめは何もなく、産み分けは医師達独自の判断で行われている。

こうした中で日本医師会と日本産科婦人科学会は、産み分けについて七月から本格的な審議に入っている。先端医療の臨床応用に当たっては、倫理面を含めた幅広い検討が不可欠の要件となっている。両会の論議のゆくえを注目したい。

ク ラ ブ ゲ ス ト

サルバドール・ラウレル フィリピン副大統領兼外相



新政権が誕生して一〇一日目。「まだ乳児みたいなものだが、貧困と内乱に取り組まねばならないのが我々の政府」「望まれていない政府から国民を解放する戦いは終わったが、社会的不正に対する戦いが我々を待っている」。弁護士出身（エール大で司法学博士号取得）のプロの政治家らしい華麗な修辭と目くばりのきいた発言目立つ。マルコス疑惑は「第一義的にフィリピンの問題。不必要に他国政府を関与させたくない。日本政府が言っていることは適切で正しい」。説明が遅れているのは「権力の乱用があまりに多方面にわたりぼう大だったため」。

SEAN外相会議および拡大外相会議の議長をとめる。上品で雄弁だが、目は意外と鋭い。【六月五日（木） 記者会見 司会 伊藤光彦企画委員 通訳 長井鞠子 出席 一四五人】

バーナード・ラウン 核戦争防止国際医師会議（IPPNW）会長
昨年ノーベル平和賞を受賞したIPPNWの会長。ラウン博士（ハーバード大公衆衛生学大学院）とチャゾフ博士（ソ連心臓学研究所）の職業を通じての長年の交友がIPPNW設立の原動力となった。現在、四一か国から一三万五千人の医師が、この運動に参加している。「六年前に存在しなかったことを考えると目ざましい発展」「多くの医師が現在の政策の延長線上では核戦争不可避と考えている」「一度、核戦争になれば医師も医学も無力、しかも核の冬がくる」と核実験の停止を呼びかける。博士はSDIにも反対の立場をとる。



広島（六月十二日）での平和シンポジウムを終え、米ソの両会長がクラブで会見の予定だったが、チャゾフ会長が一足先に離日したため、片肺会見になってしまった。【六月一四日（土） 記者会見 司会 中村貫事務局長 通訳 佐藤敬子 出席 三四人】

東島 克己 評論家

故町村金吾衆院議員の秘書をつとめた後、日本教育協会へ。現在、常務理事。「大学問題や学生運動を研究してきたわけですが、過激派に占める学生の割合はいまや20%以下になっていきます」。



新左翼過激派の誕生の背景と分裂をくり返してきた生い立ち、現況等について話を聞く。現在、主なものだけでも三〇数派にのぼる。総勢力約三万五千人。中核派は一五〇〜二〇〇人の革命常備軍を温存、これに革労協狭間派、戦旗、プロ青同、共産同戦旗を加え武闘五派。が、一般的には「本物の武器を持って組織を壊滅されるとの危惧から、限界を考えながら行動」。国際テロとの連携へ進んだ時が真の脅威か。【六月一八日（水） 研究会 司会 石丸和人企画委員 出席 六七人】



アグネス・チャンさん
香港での婚約会見の際、日本兵の残虐行為を知っているのか、戦争になったら夫や子供を殺せるのか、といった質問を受

け、返答できずに泣いた。しかし、いまはこう言う。「自分が悪かった。日本人が嫌いになるかと思って、暗い過去を学ぼうとしなかった。本当のことを知るべきだった」。子供のため（十一月誕生日定）にも両国の間に何があつたかをもっと勉強しようと思っている、とも。ご主人の金子さんもマネジャー役で同行した。【六月一九日（木） 懇談会 司会 有馬真喜子企画委員 出席 六三人】

杉浦 喬也 国鉄総裁

「最後の国鉄総裁」として昨年六月二十五日に就任し、ほぼ一年を経過。「改革の方向へ着実に歩を進めていると思う」「選挙後極力早く臨時国会を開き、夏休み返上の集中審議を期待」「責任は国鉄労使、運輸省、政府・自民党、場合によっては野党にも……責任追及はあまり意味がない」「一年遅ければ二兆円の増税と同じこと、事態は緊急を要する」。



質問に答え、資産の売却対象をいづれ公表するとし、ギリギリ五か月の準備で民営移行が可能との見通しを示した。記念署名は「汝明日を思い煩うこと勿れ」【六月二三日（月） 委員会 司会 山岸一平企画委員 出席 五人】

スタジオ訪問

NHK

〔くらしの経済セミナー〕

身近なテーマで 経済問題を

私事で恐縮だが昨年夏、川崎から杉並へ引越した。その時運送業者に見積りをしてもらった。大手A社116万九千円、同B社112万円、中小C社119万八千円。随分と差があるものだと思っただ。それに、ダンボール箱の値段の高いこと。一個四百円と七百円というのにはびっくりした。どうしてこんなに高いのか。見積りの七万という差は一体どこからくるのか——六月二十一日放送のNHK『くらしの経済セミナー』は、こんな私の疑問に答えてくれた。番組のテーマは「こうして防ごう引越ストラブル」。

同番組（土曜午前八時半から一時間）は、暮らしの中の身近な経済問題を取りあげ、実証的に掘り下げていく。たとえば「新商品学 入れ歯」「電気ガス料金値下げ」「点検 民間医療保険」といった具合に、経済をストレートに真正面か

らぶというより、「一見経済と結びつかないような日常生活の問題をさぐっていきやり方」（繩手政雄チーフディレクター）で経済のしくみを理解してもらおうというのだ。

視聴率は十五〜二〇%。意外と男性が見ている。男性の視聴率はウィークデーの同時時間帯の二倍にもなるそうだ。

番組制作の視点を、生活の場々に置いてあるせいも、毎回視聴者の反響が大きい。「入れ歯」を放送した時は、なんと七百本以上の電話がかかってきたという。「この応待が大変なんです。毎回主婦レポーター二人とスタッフ一人が、番組が始まると同時に電話番となります」と門目省吾チーフディレクター。

この日も放送中だけで三十本を超える電話が入った。内容によっては放送で即座にとりあげることもあり、この日は中小の引越業者からの反論が、キャスターの永井多恵子解説委員にメモで渡された。

画面で示した数字がひとつの基準になっ
てしまい、数字だけがひとり歩きしてしま
うからだ。「私たちは、判断の手がかり
を視聴者に与えているだけなんです。数
字のウラにあるものを伝えたいし、視
聴者にもそこを読んでもらいたい」と言
う。永井さんはいつも「複眼」でものを
とらえるよう努めているという。

スタッフは口をそろえて「後始末の大
変さ」を語る。年金問題を扱った時は、
放送後三、四か月しても手紙の問い合わせ
が続いた。質問の多くが自分の年金は
いくらになるのか、といった類のものだ
ったが、それら全部を事例毎に調べ計算
して返事を出した。「これだけいつも反
響があるというのは、みんな情報に敏感
になっているということでしょうか」と
永井さん。しかし、繩手さんは「本当に
必要な情報が本当に必要な人に伝
わっているのか、いつも疑問に思う。豊
田商事がいい例でしょう」と語る。

同番組では四月から『びっくあっぷ』
というコーナーを設けた。検証的にしっ
くりと取り組み、取材にも約二か月とい
う時間をかけるメインテーマに対して、
こちらは最新のニュース的なものをレポ
ートする。この日は『労働者派遣法』。
担当の風見雅章アナウンサーは「取材デ
ータの中から何を捨て何を拾えばわかり
易く伝えられるか、まだ悪戦苦闘中」と

いう。

四月から制作スタッフに加わった中山
亮一チーフプロデューサーはこう語る。
「総中流意識、GNP世界二位というが、
番組の反響例をみても、たとえば売り手
と買い手、医者と患者、行政と住民の間
にはかなりの隔りがある。この番組が
そのすき間を埋めるつなぎ役になればと
考えています」

ところで、土曜日はスタッフにとって
長い長い一日となる。生放送終了後の解
放感を味わう間もなく、翌週の『びっ
くあっぷ』のテーマ選びやメインテーマ
の準備、相談と続く。スタッフ全員が顔
をそろえるこの日は、密度の濃い仕事か
できるというわけだ。その間視聴者から
の電話も鳴り続ける。そして夕方に再放
送がある。「こんな酷な生番組ないなっ
て、同僚にも言われるんです。これ、ぜ
ひ書いてくださいな」と、永井さんはに
っこり笑った。

（長谷川和子）



午前7時半、スタジオではすでにゲストを混じえ
てリハーサルが始まっていた（右から風見アナウ
ンサー、坂井レポーター、永井キャスター）

アークヒルズ見学会



舞台の真ん中に立つ。背後はパイプオルガン。写真では見えないが頭上にはビールのアワみたいなシェンデリア

六月二十四、二十六日の両日、赤坂、六本木、虎の門の三角形の中心に誕生した「アークヒルズ」の見学会を実施した。出席はいずれも定員満杯の五〇名。
 「サントリーホール」十月十二日、サヴァリッシュ指揮でN響によるベートーベンの第九が落成記念として演奏される。見学当日は、パイプ数五、八九八本の超大型パイプオルガンの最終取り付け工事が行われていた。総席数二、〇〇六席のワインヤード方式のクラシック専用ホール、室内楽やファッションショーにも使える小ホールのほか、オープンしたならなかなか一般にはのぞけない指揮者

や演奏家の控室（シャワー付）も見学。名演奏に酔い、なおかつ一杯やれるようにバーもつくられているが、置くお酒はサントリーと同社が輸入するもののみとのこと。
 「テレビ朝日」地上2階、地下4階のテレビ朝日放送センター。報道番組「ニュースステーション」用の大型スタジオ、定時ニュース用のオープンスタジオを見学。リモート室やマスター室では技術的な質問も出席者から次々と。
 「東京全日空ホテル」まず36階のスカイバンケットルームで、ご自慢の眺望を楽しむ。その後、水と緑と光を調和させたアトリウムロビー（高さ一四m、広さ二、一〇〇m²）、レストラン街、メインバーなどを見学。地上37階、客室九〇〇室。三角形なので、各室からの眺めが最高。

大忙ぎで前記三か所を回った後、森ビルの広報室で、「アークヒルズ」の概要を紹介したビデオをまず見る。その後、この再開発事業に当初からタッチしてきた横山寛課長が、カバンをさげ



アーク森ビル4階広報室で若々しい横山課長のブリーフィング



報道用のオープンスタジオ。左のカメラは別室からのリモートコントロールで動く

て長屋づたいに説得に回った苦労話や権利者の人たちの生活設計のお世話など、当事者ならではの秘話を語る。五・六ヘクタール、七〇〇億円という規模の事業の基礎に、「人間にふれあいあり」の感深し。ちなみに組合員（五七人）一人当たりの権利は一〇〇億分の一からとか。

会員の著書（ご惠贈いただきました）

日本人の国際感覚

ロイ・ロックハイマー

土着権力

四方 洋

寄贈書

昭和の戦争 2

講談社

将軍の遺言

毎日新聞社

余録Ⅱ

〃

知的生産者の発想現場から

TBSブリタニカ

知的生産の技術

〃

千山万里の旅

庄子勇之助

61年版 防衛ハンドブック

朝雲新聞社

THE JAPANESE PRESS 1986

日本新聞協会

南北対話

韓国国際文化協会

BRITAIN1986

イギリス大使館

展覧会の招待券 朝日新聞社から

「富本憲吉展」「吉井淳二展」「大黄河文明の流れ 山東省文物展」、平

野光男会員（西武百貨店）から「小

松均展」「日本のイラストレーション

1986展」の招待券をご惠贈いた

だきました。お礼申しあげます。

プロフィール

第135回企画委員会(6・3 大会議室)

事務局から東京放送・水野堯氏から久木保氏への委員交替を報告。司会をした各委員から行事報告の後、七月のゲストと行事について協議した。七月六日の同日選を前に七党代表の連続会見を行うこ

とを決めた。

出席 浅井、伊藤、山岸、広瀬、有賀、石丸、久木、鈴木、浅野、有馬、中川、三宅、村野の各委員。

第27回会報委員会(6・16 小会議室)

六月号、記録版について意見交換の

(6月1日付入会の個人D、法人・個人賛助、特別賛助会員の方々です)

後、七月号の編集方針を協議した。

出席 深川委員長。林、井出、斎藤、安延の各委員。

第26回施設運営委員会(6・17 大会議室)

八階に拡充するクラブ・スペースの機能、デザインを検討。引き続き七月十五

日の委員会で協議し、最終決定の予定。
出席 原委員長。天野、和田、宮地、山崎、黒木の各委員。

第106回会員資格委員会(6・17 小会議室)

七月一日付の入退会を審議し、理事会へ答申した。

出席 渡辺委員長。中川、小池、加藤、樋口、林、玉井、青木、埜邑、長竹の各委員。

同日選で各党代表連続会見

七月六日の衆・参同日選を前に、クラブでは恒例の七党代表(幹事長・書記長レベル)のレレー会見を行った。

七月一日の初日は、公明・矢野書記長(112人)、自民・金丸幹事長(110人)、社会・田辺書記長(110人)、新白ク・山口幹事長(95人)、翌二日は民社・大内書記長(96人)、共産・金子書記局長(101人)、社民連・由選対委員長(74人)。有権者はシラケ気味のようなが、会員の関心は高く、出席者の増加が目立つ。

クラブの連続会見は第10回参院選(49年7月)から始まり、ロッキード事件(51年3月)、第34回総選挙(51年12月)、第11回参院選(52年7月)、統一地方選(54年3月)、第35回総選挙(54年10月)、衆・参同日選(55年6月)、第37回総選挙(58年12月)と続き、今回で九回目。



▼ガリオア・フルブライト東京同窓会は、来る七月十八日(金)午後六時半から、定例懇談会を大日本インキ化学工業(DIC)ビルで開催します。(日本橋高島屋隣)。講師は慶応義塾大学文化研究所の鈴木孝夫教授。テーマは「言葉と

国際摩擦」。会費は飲物と軽食付きで二千円。日本記者クラブ会員でガリオア・フルブライト東京同窓会会員はもちろんのこと、取材のための参加を歓迎します。その次の定例懇談会は十月十七日(金)夜(ガリオア・フルブライト東京同窓会広報委員長 坂本 宏)

▼この六月で社団法人共同通信社の常務理事を退任し、関連会社である株式会社共同通信社の監査役に就任しました。不慣れた事業や経理に関する仕事なのですが、今はその初歩の勉強をさせられていますが、そのうちに多少はヒマが出来るでしょうから、クラブにももっと頻繁に顔を出したいと思っています。よろしく。(共同通信社 下田進一)

会合紹介

2日▽新聞研究座談会「いま求められる記者教育とは何か」青木忠義(朝日)、天野勝文(毎日)、外山四郎(読売)、山崎勝彦(日経)、亀山旭・司会(共同)の各氏(協会 林利隆会員) 5日▽重存慧齋陽音楽学院顧問歓迎会(秋岡栄会会員)▽第17回ニュースハイライト賞贈賞式「和歌山放送」円高ドル安をなげく帰国移民、「東北放送」国鉄余剰人員で直営レストラン、毎日放送「浪花っ子のタイガースフィーバー」、新潟放送「実現するか角栄トンネル」などが受賞(TBS 中村欣資会員)▽61年度NRN(全国ラジオネットワーク)総会(文化放 柴正明会員) 6日▽在京九社編集局長会(協会 宝子山幸充会員) 7日▽オーストラリアの人工授精に関

する記者会見(豪大使館 武田吉朗会員) 9日▽山田耕伴生誕百年感謝の集い(NHK 井手重昭会員)▽F M fan 創刊20周年記念謝恩パーティー(共同 酒井新二会員) 10日▽田島正蔵氏叙勲祝賀会(日経映像 久地岡榛雄会員)▽第9回ASEAN記者研修計画歓迎レセプション(協会 阪田秀会員)▽「御在位60年記念 日本美術名宝展」記者発表会(電通PR 田中正博会員) 11日▽高橋栄子さんを送る会―二十五年間宮内記者会をお世話してきた高橋さんの労を、記者会の現役、OB百十三人が集まりねぎらう(朝日 岸田英夫会員)▽水野要さんを励ます会(中日 佐々木昇会員) 12日▽座談会「臓器移植を考える」遠藤周作、太田和夫東京女子医大教授ほか(河北 温美重幸会員) 13日▽J

NN報道部長会・懇親会(TBS 東守之会員) 17日▽経済論説研究会(サンケイ 五十畑隆会員)▽小笠原竜三・木村繁両氏激励会(朝日 富森観児会員) 19日▽日本ABC協会員懇親パーティー(井上済会員)▽十七社会(福島民友 白鳥恒夫会員)▽第57回定例会員総会、講演「日本人の社会生活」石原俊経済同友会代表幹事(協会 山田年栄会員) 20日▽新聞協議会―講師 宮崎輝旭化成工業代表取締役会長(山形 堀田稔会員) 23日▽村田為五郎さん叙勲祝賀会(時事村上政敏会員) 25日▽ワルター・ボス駐日西独大使夫妻送別パーティー(共同 吾郷慶一会員)

〔会員がクラブ施設を利用して行った主な会合です。六月の総回数は一三三回でした。〕

○囲碁の会

初のスイス方式による夏季大会の全順位は次の通り(13位までが賞の対象者)。
①竹内善昭初段②伊藤光彦六段③船山庄一三段④以上三名が優勝④山崎政人四段⑤馬淵良俊初段⑥井出新六一級⑦山根耕志五段⑧新井明四段⑨大留明夫三段⑩石川基二段・山本雄二級⑪白井敏之三段⑬浅野道彦四段⑭井上豊人初段⑮後藤光祥二級⑯岡本利男五段・滝川勇四段⑰堀川敏雄五段⑱大日向一郎四段⑲石崎信治六段⑳橋本正邦五段㉑相川誠一二段㉒米忠一三段㉓斎藤吉史三段㉔小野盛四郎初段。(番外・吉沢正也六段、出田裕六段、都留重人一級)。
伊藤六段は最近十五局の勝率が・八六七で遂に最高位七段に昇段した(過去一年間の成績 31勝8敗)。次回例会は七月二十六日(土)午後一時から大會議室で。



一年間の成績 31勝8敗。次回例会は七月二十六日(土)午後一時から大會議室で。



写真部

四十一年後のいまも

写真 大城 弘明 (沖縄タイムス社写真部)

終戦直後の写真ではない。ことし二月末に沖縄で行われた「県民遺骨収集」の一場面である。

サンゴ礁の島、沖縄には自然壕が多い。鉄の暴風にさらされた沖縄戦の末期に、壕の中に避難したまま砲弾で生き埋めにされたり、壕の中にガス弾を撃ちこまれ全員死亡したり、入り組んだ地形の中でいまだに埋められたままの白骨も多い。

地獄の戦場といわれた糸満市、具志頭村を中心に「県民遺骨収集」が始まり、五千人の人びとが低木の林に入り岩陰を掘り起こし、四百四十余柱の遺骨を収集した。

水筒や飯ごう、印鑑などが遺骨のそばにころがり、死ぬまで身につけていたことを偲ばせる。こどもをまじえた一家らしい五人がひとところ遺骨となつてゐる姿もあった。

つぎつぎに発見される遺骨に収集団は息をのんだ。四十一年たつてもこうである。住民を巻きこんだ戦争の惨禍はいたましい。

夏、若者のレジャー基地となる沖縄だが、澄んだ海と白い砂の一方で、凶悪な戦争のツメあとは深く残っている。

(入江 徳郎)

江尻会員が新聞人の絵を寄贈

クラブに飾ったほうがふさわしいのではと、新聞協会の江尻進会員から、十九世紀半ばの著名な英国新聞人を描いたユーモラスな絵をいただきました。ザ・タ



江尻会員(左)と中村事務局長

イムズのトーマス編集長ら三枚の絵は、八階の応接室で間もなくお目見得の予定。

山形新聞から『さくらんぼ』

六月二十六日、東京は前夜の激しい雷雨から一転、真夏を思わせる日差し、この時季には珍しく富士山もクッキリ。いよいよ夏近し。この日、山形新聞社(服部敬雄社長)から、毎年の季節の便り、極上のさくらんぼがクラブに届きました。早速、いつものようにラウンジで、会員の皆さまにも賞味していただきました。

土曜の夜のレストランを休みます

七、八月は例年通り土曜の夜のレストランは休ませていただきます。なお、五月号既報のように理事会決定に従い、この夏の臨時休業を延長させる形で、土曜の夜のレストラン営業は、通年にわたり中止となりますので、ご了承願います。

クラブ訪問者

6月7日 エンリケ・J・ロス アルゼンチン大使、ノルベルト・オウジエ同国家儀典長、カルロス・カストロ同大統領府報道局長

ゲスト・カード

アマタブハ・チョードリー (エイシャン・ファイナンス・ペブリケーション) 客員研究員
吳学文(総合研究開発機構)

会計係からのお願い

最近、会費をご持参になる方が増えていますが、その際にも恐縮ですが、お送りした請求書をお持ちいただくようお願いいたします。また、半年または一年分の会費をまとめた請求書もお出ししています。ご希望の方はお申し出ください。

なお昨年から郵便振替口座も開設しています。五万円以下の場合手数料百円です。詳しくは事務局の会計係までお問い合わせください。

新しい会員名簿をつくります

八月一日付で新しい会員名簿を作成する準備を始めた。

個人D会員、特別賛助会員の方がたで住所、役職、連絡先などの変更がありましたら、至急事務局の長谷川、河野(五〇三)―二七二までお知らせ願います。

七月一日現在の会員状況 法人会員 一四六社 基本会員 六三二人 個人会員 一、三〇八人 法人・個人賛助会員 七七社 二三〇人 特別賛助会員 七八人 名誉会員 一六人 計 二二三社 二、二六四人

フロアに『新戦力』

元新聞配達青年の菊池君

七月一日から当面アルバイトとして菊池新吾(二十一歳)がクラブのフロアマネジャーとして働くことになりました。宮崎県の延岡出身です。サンケイの奨学金



で東京工学院外語専門学校へ入り、二年間、新聞販売店の仕事も学校も無遅刻・皆勤というガンバリ屋です。よろしくご指導ください。

計報 原口六哉会員(個人D)が、六月二十七日急性肺炎のため逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

七月の行事(五日現在)

- 16日(水) 午前11時30分〜午後1時15分 ラウル・R・アルフォンシン アルゼンチン大統領昼食会
- 17日(木) 午後2時〜3時30分 シリーズ研究会 「フ連―その実態と意図」(XII) 栗原良樹総合研究開発機構研究員

会報委員長 深川 誠

委員 林 利隆 井出新六 斎藤吉史 安延久夫
連絡 長谷川 河野(事務局) 五〇三―二七二